
テスト・オブ・少女

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テスト・オブ・少女

【Nコード】

N3519T

【作者名】

ウルフガイ

【あらすじ】

このごろなんだかパワーが減退気味なので、暇つぶしに書いてみました。

（前書き）

始まりから終わりまでスカツとしないなという気がする。
オリジナルも二次も練習あるのみ。

とある普通の少女を主人公に据えてみる試み。

「こんにちは、あなたがヒロトさんの妹さん？」

「え？ あ、はい、そうです……」

知っていた。

私は知っていた。

「まあ！ 話で聞いていた通りすごく可愛いのね！」

「あ、ありがとうございます……」

そうだ、私は知っていた。

私の兄貴はオタクで変態で……とにかく変人であると。

だが、知っているからこそ今こうしてうるたえてしまっている。

いつものあたしなら毅然とした態度でテキパキとした対応が出来るはずなのに、無様にも玄関で対応する相手を前にうるたえてしまっているのだ。

「お兄さん、呼んできてくれないかな？」

「——わかりましたっ！」

気合を入れた返事が妙に弾んでしまった気がする。
でも仕方ない、仕方ないんだ。

だって、あの変な兄貴に彼女ができるとか普通考えないでしょって！

実験的な短編その一　　～変な兄貴に彼女が出来たの事～

「やーやー我が妹セイナよ、ご苦労だったな」

「うつさい！　下に待たせてるんだからさっさと行け！」

あたしはすぐに兄の部屋を訪れた。

よく考えたら上がってもらって直接兄の部屋に行かせてもいい気がしたけど、呼んできてって言われたから、つい。

というか兄貴の部屋を、あの明らかに清楚なイメージを持つ彼女さんに見せるのはどうかと躊躇われたからでもあるのだけど……彼女って言うくらいだからあたしが知らない間に部屋に入れてるに決まってるよね。

「……はあ」

タツタツと軽い足取りで階段を下りていった兄貴を二階から見送って、あたしはため息をついた。

別に兄貴に彼女が出来たことに驚きすぎたため息をついたわけじゃない。

ただまあ、なんか疲れたなっで感じ。

兄貴……中里博人は、一言で言えば変人であり、加えて言うなら天才である。

子供の頃からとにかく他の普通の子供とは一線を画していて、あたしには言ってる事もやっでる事もサツパリ理解できなかったことを覚えている。

それでも子供の頃は、あたしが知らないことでも何でも知っでいる兄貴に尊敬のような感情を抱いていた。

しかし、それもあたしが世間一般的なオンナノコの年齢になるまでだった。

その頃には兄貴は重度のオタクとなっでいて、元々の変人さと合わさっで凄く変な人になっでいた。

普段は何を考えてるのかわからないし、部屋の中にはオタクのグッズのような物があるし、それでいてあたしよりもずっで頭が良くて高3で受けた模試で全国トップとか嫌になっでちゃう。

あたしなんて毎日毎日勉強やっで、それでやっで行きたい高校にけるっで感じなのに……そりゃ女子高生だから普通に遊んだりオシヤレしたりもしてたけどさ。

「にしても、兄貴に彼女がいるなんて思わなかつたわね」

部屋に戻り、ベッドに寝転がっであたしは呟いた。

確かに兄貴は容姿は悪くない。たぶん中の上くらいだと思う。クラスに読モをやっでる女の子もいるし、これでも一応目は肥えてるつもりなのだ。まあそれが男相手に通用するかは知らないし、兄妹だから大分変わると思うんだけど。クラスの男子の平均的な容姿よりは上なような気がする。

……まあ、それ以上に兄貴の纏っでる雰囲気とか空気とかが人を寄せ付けない感じで、彼女なんて絶対にできるはずが無いと思っでいたんだけど。彼女なんか絶対に作らないような正確だと思っでたし。

「うう、あんな雑誌でも滅多に見ないような清楚お嬢様系の超美人が来るなんて思わなかったわ……」

玄関で見た女の人の姿を思い浮かべてゴロゴロ転がる。

白い服とゆったりとしたスカートを身に付けて、まさしく深窓の令嬢ってイメージの人だった。

同じ女としてもものすごく敗北感も味わったけど、あの人が兄貴と付き合っている事の方に驚きすぎて気が回らなかった。

一体全体どこで知り合ったのか……さっぱりわからない。

「あの女の人が兄貴と同じくらい天才とか」

これなら十分にありえる。

兄貴が頭がいってのは周知の事実だけど、なんか難しい内容の論文もいくつも書いてるのは見た事あるし。そういった方面で知り合ったとか。

休みの日にはもっぱら部屋に籠ってる兄貴だけど、たまにどこかに出かけていくことがあったし。

きつと、あの女の人と一緒にデートとかしてたんだろう。

「……まさか、あの女の人までオタクなんて事無いよね」

もしそうだったら私の自信とか感じた敗北感とかをなんとかして欲しい。背も高くてスタイルも良くてお嬢様な雰囲気……そんな凄い人がオタクとかだったらなんか嫌だし。

いや、ありえないと思うけど。

うん、ありえないと思うけどまさかって事はあるかもしれないし。それに私が子供の頃に兄貴を尊敬していたように、今の兄貴を見て素直に凄いつて感じた可能性もあるし。

「あの彼女さんが兄貴の変人ぶりを少しは治してくれるといいんだけど……」

ま、無理か。今まで家族で躍起になって矯正しようとしてきたけど無理だったんだし。

でも、せめて少しくらいは人の目を気にするようになって欲しいな。

「……いただきます」「」

夕暮れ時、居間のテーブルで晩御飯を家族一緒に食べる。

大学で教授をしている父は、何故だかいつもより早く帰ってきてくれて晩御飯には早めの時間だ。

兄貴の席は私の隣。いただきますと言ってすぐ、箸を掴んで黙々とご飯を食べている。

うちの一家団欒の時間はたいてい晩御飯の時なんだけど、兄貴はいつつもこうして早く食事を済ませようとする。それでも聞けば答えてくれるし、興味がある会話には首を突っ込んでくるからマシなんだけど。

とりあえず今日はあの人の話題でも振ってみようか。

「ねえ兄貴」

「なんだ我が妹？」

「……えーと、お昼に来たあの彼女さんの事なんだけど」

「ああ、彼女か。そうだねえ。私を理解してくれる女性だと言って
おこつ」

いや、あの。

私はまだ何も言っていないんだけど。

というかお父さんもお母さんもポカンとしてるじゃない。

「ごちそうさま」

「あ、ちょっと……」

「すまんな妹セイナ、先約があるのだ」

「は？」

結局、晩御飯を済ませた兄貴はそんなワケのわからない事を言つて
居間を去つていった。

というか玄関からドアの音したし、外出した？ あの兄貴がこんな
夜に？

ますます謎だわ。さっぱりわからない。

「ねえ、静菜。あなた何か知ってる？」

「ううん。知らない。むしろ知りたいくらい」

「そうよねえ……まああの子は昔からあんな感じだったし。ねえお
父さん？」

「そうだな。私はあいつも彼女くらい作れるとわかつて一安心だよ」

父さんと母さんはそう言って笑い食事を続ける。

うーん。さすが兄貴と私の両親だ。今すぐそこで外に出て行った兄貴はスルーみたいだ。

まあ、あの兄貴の事だから先に根回ししてあるのかもしれないけど。

「あたしもごちそうさま」

「あ、静菜。宿題は？」

「もうやった！ …… お風呂入ってくる」

「はいはい。お父さんはまだまだここにいてから安心なさい」

母さんがそう言ってお父さんを見ると、テレビでニュースを見ながらお酒を飲んでいるところだった。

うん、あの様子ならしばらく浴室の方には近づかないだろうし、さっさとお風呂に入ってしまったおう。

さっぱりして、さっさと寝てしまおう。

明日も学校があることだしね。

（後書き）

あとがき

まったくのオリジナルというつもりで書いていたら……

いつの間にかこの兄貴が付き合ってる女性をあのバジーナにして、
クラスにいる読モの子を隠れオタのあの子にすれば、普通に二次創作に出来るんじゃないかと思った。

思っただけ。今のところは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3519t/>

テスト・オブ・少女

2011年10月9日21時12分発行